中国の中等教育改革と高校生

大塚　豊
（広島大学大学教育研究センター助手）

一、中等教育の概況

中国では、高校生も中学生も「中学生」と呼ばれる。つまり、わが国の中学にあたるものは「初級中学(初中)」であり、高校にあたるものは「高級中学（高中）」だからである。「高等学校」といえば、それは大学など高等教育機関を指すことになる。

現在、五年制の小学校の上に三年制の初級中学があり、その上に二年制の高級中学、さらにその上に四～五年制の大学が来るというのが、大まかな学校制度である。

本稿で取り上げる高校、すなわち高級中学はもともと三年制から出発した。それが、文化大革命における毛沢東の指示のひとつ、「修業年限は短縮しなければならない」に従って、二年制になったのである。なお、初級中学も文革中には二年制であったが、その後もとの三年制に戻ったのである。中等教育は五年一貫制が建前になっており、普通、一つの中学に初中クラスと高中クラスが置かれるが、農村部などでは、小学校に二年制の初中クラスが附設される場合もある。

表一　中国の各級学生数（一九七八年現在）

大学・高専	八五万人
中等専門学校	八八万人
初中・高中	六五四八万人
小学校	一億四六二四万人

五年一貫制を建前とするため、授業科目は高中と初中で明確に分けるのは難しいが、一般に、中学段階では、政治、国語、数学、物理、化学、生物、外国語、歴史、地理、農業常識、生理・衛生、体育、音楽、美術の一四科目が教えられる。一九七八年に出された「全日制十年制小・中学教育計画草案」によれば、中学での一週間の授業時数（一単位時間は普通四五分）は二八～二九

であり、学校内での課外活動は一四となっている。年間ほぼ九か月が授業にあてられ、五年間の総授業時数は四八六二とされている。

ところで、高級中学というのは全日制の普通教育機関であって、全日制の中等教育機関には、この他に工業、農業、林業、医学、財政経済、体育、芸術など、わが国の職業高校に相当する中等専門学校や中等技術学校などがある。修業年限は二年制、三年制、四年制と多様である。各分野の中では、さらに工業で二四二、農業で二五、林業で一一、医学で一二、財政経済で三四、芸術で二〇など、細分化した専攻が設けられている。

中等専門学校のカリキュラムは、大きく言って、政治、一般教養科目、基礎科目、専門科目にわかれ、専門科目は総授業時数の約四分の一を占めている。また、授業時数は四年制のもので三五〇〇、三年制のもので二六〇〇、二年制のもので二〇〇〇となっている。

この他、中等教育機関としては、全日制ではなく、半労半学(半分働いて、半分勉強する)制の農業中学とか、業余学校と呼ばれるパートタイムの学校もある。

二、中等教育構造のアンバランス

以上述べてきたような種々の学校から成る中国の中等教育制度は、現在、その構造をめぐって活発な議論が交されている。各種の中等学校の間に量的なアンバランスがあり、国民経済の発展に必要な人材の養成が適切に行われていないというのである。

吉林省を例にとり、後期中等教育段階の就学者数を見ると、一九六五年には、高級中学生は全体の四三・七%、中等専門学校・技術学校生は二八・八%、半労半学学校生は二五・五%と、比較的バランスのとれた構成になっていた。また、一九六五年には吉林省全体で八五校の高級中学があり、在学生数は四万五千人余りで、都市部を除き、ほぼ各県に一校の高級中学ないし初中、高中を備えた完全中学が存在していた。それが、一九七八年には、学校数は一九〇二校に、在学生数は七四万九千人余りに増えたのである。六五年に比べると、学校数で二一倍強、在学生数で一六倍弱という伸びである。卒業生も、六五年の一万一千人余りに対し、七八年には三五万人余りと、三〇倍の増加である。このこと自体は、中等普通教育の普及を示すものとして喜ぶべき数字なのであるが、問題は、高級中学の伸びに比べ、他の中等教育機関がそれほど発展していないということである。このことは、二つの問題を引き起している。一つは、高等教育の普及が遅れているせいもあるが、六五年ごろには高級中学卒業生の三人に一人は大学に進学できたのに、現在は三〇人に一人になっている点である。他の問題は、就職との関連においてである。

例えば、長春地区では、一九七八年に、中等学校卒業生を含む一五二〇〇人が各職場に分配されたが、このうち中等専門学校や技術学校の卒業生は二二〇〇人に過ぎず、一方、六三〇〇人余りは高級中学卒業生であった。彼らは建築、工業、財務、貿易など

の部門に分配されたが、高級中学卒業生はとくに各職業に必要な専門知識や技能を欠いており、仕事にならないという状況が生じたのである。

こうした問題を是正するために、現在検討されていることは、高級中学の発展を適度に抑えてでも、中等専門学校、技術学校などの建設を促進するという方向である。

三、ある大学生の誕生から

七九年九月六日付の『光明日報』は、一人の大学生の誕生を報じた。北京工業大学への入学が決った黄帥という女子学生である。彼女のことを新聞がとくに取り上げたことには、それなりの理由がある。彼女こそ七三年に起った「小学生日記事件」の主役だったのである。

当時、教師の指導方法を批判した小学五年生の黄帥の日記が新聞に載り、彼女は「勇敢に流れに逆らう小勇将」として称えられるということがあった。すなわち、教師の地位は絶対であり、その権威は少しも揺るがされることは許されないという意味の「師道尊厳」といった旧い儒教的な考え方の名残りを除去する上で、彼女の行動はすぐれたものとされたのである。

一方、こうした行動に反対する意見も聞かれた。例えば、彼女の日記が新聞に載ると、内モンゴル生産建設部隊の三人の青年は、「王亜卓」というペンネームで、この行動をいさめる投書をした。しかし、当時の「批林批孔（林彪を批判し、孔子を批判する）運動」の潮流の中では、彼らはかえって、旧い秩序を維持しようとする者として批判された。

その後、いわゆる「四人組」が失脚すると、この事件は彼らによってでっち上げられ不当に誇大宣伝されたものとの評価が下された。状況は一転した。そして、ちょうどこのころ、当の黄帥は高級中学に進んだのである。周囲の目は彼女に冷たかった。同級生は同じクラスに彼女が入ることをいやがり、時に嘲笑し、正面きって彼女を罵倒する者もいた。「師道尊厳」に反対する運動の中で自殺に追い込まれた二人の同僚をもつある教師は、黄帥の担任教師にその恨みを本人に伝えてくれるようにと言い、また、学校で農村に農業を学ぶために出かけると、農民たちは、黄帥のために多くの青少年の風紀が乱れ非行に走る者が増えたと非難した。

こうした雰囲気の中で、当然のことながら黄帥は孤独であり、沈み込んでいた。しかし、担任教師を中心とする人々は、なんとか彼女を立ち直らせようと努力した。周囲の非難や攻撃からは、彼女も「四人組」の被害者であるとして護り、他方、「日記事件」のもたらした影響についてそれほど明確な認識をもっていなかった本人には、事実は事実として厳しく教育する努力が続けられた。こうした努力の結果、彼女は徐々に立ち直り、七九年度の大学入試に合格したのである。ちなみに、成績は合格点に達していたものの、一部には彼女の入学を許可することに反対の者もあったという。

ただ、問題はひとり黄帥の場合のみに限られるものではない。

文革中には、紅衛兵運動に象徴されるように、青少年が前面に現われることが多かった。例えば、文革の火の手があがると間もなく、現行の入試制度や教育制度を批判し、労働大衆や現実社会と教育との結びつきを強めるよう主張したのは、北京の高級中学生、つまり高校生のグループであった。そして、彼らの主張通り、入試制度は改まり、中等学校卒業後は全員労働に従事し、職場の大衆に選ばれた者だけが大学に入学しうるようになった。この他、教育内容や方法の面でも政治や労働との結びつきが強められた。しかし、「四人組」が失脚し、文革の終結宣言が出されるとともに、中国の教育はその方向を大きく変えたのである。

四、「現代化」のための諸改革

現在、中国は国をあげて「四つの現代化」、すなわち、農業、工業、国防、科学技術を今世紀中に現代化するという目標に向っている。そのため、人材養成を担う教育の分野でも、種々の試みがなされている。

そのひとつは重点学校の指定である。これは、全国の教育機関の質を一挙に向上させることが客観的に不可能な現状において、いくつかの拠点校の施設・設備や教員の質をまず充実することをねらったものである。重点学校は初等教育から高等教育まで、いずれのレベルにも存在し、また中央の教育部によって指定されるものと、地方の教育行政部門によって指定されるものとがある。中等学校では、天津南開中学や上海師範大学附属二中など数校が中央の教育部によって指定されている。

ところで、この制度は元来文革前に存在したものであるが、文革中はエリート主義教育の温床になるとして停止されていたのである。重点校といえども驕ることは戒められているし、その他の学校も徐々に重点校になる可能性は残されているとはいうものの、人材の効率的な養成のためには、とりあえず格差も仕方がないという政策意図なのである。

つぎに、七七年からは全国統一の大学入試が復活したこともあげなければならない。しかも、文革中には大学への応募条件として全員に課されていた一定期間の労働経験も必ずしも課されなくなった。高級中学から直接大学に入学することが可能になったのである。このように直接入学する者の割合は、七七年の場合、定員の二～三割とされたが、七九年には六六%強と増加している。

大学入学者選抜方法の変更は、単に高等教育内部の問題ではなく、一般に、教育内容など中等以前の教育全般に与える影響は甚大である。中国でも、このことはあてはまる。大学受験という目前の目標をすえられた高級中学の教育は、いきおいこの目標のみに目が向くようになった。それがいかなる状態であるかは、教育の最高責任者である教育部長がその行き過ぎを警告していることからも、容易に見てとれる。

一方、高等教育の機会が非常に限られているという現実がある。七九年の場合、全国の四六八万人の受験者のうち、大学入学許可になったのは約二七万人であった。競争率は約一七倍であ

る。また、同一年齢層に占める大学進学者の割合は一%強とされる。驚くべき狭き門なのである。

また、大学入試が再開されるとともに、初級中学、高級中学への入学に際しても試験が実施されるようになった。例えば、上海市の場合、七九年には二二万の初中卒業生があったが、このうち約八割が試験に合格し、高級中学に進むことができたという。

このように、中等教育、高等教育とも入学試験が重視される一方、平素の教育では、文革で低下したといわれる質を向上させることが第一の目標となってきた。そのための措置のひとつが能力別クラス編成である。

例えば、北京市第一中学では、高中一年生の学力について調査したところ、三八〇人の生徒の中で、授業についていける者は四分の一しかなく、四分の二の生徒は初中二～三年相当の水準であり、残り四分の一については、国語力が小学校三年生程度であることが判明した。能力別クラス編成は、こうした学力程度のきわめて大きなバラツキに対処するために考えられた。具体的には、①生徒本人が自発的に申し出て、②父兄が同意し、③学年と学級で審査し、承認する――という手順がとられ、「快」「中」「慢」という三段階のクラスが編成された。

ところで、「慢班」、つまり進度の遅いクラスは、学力程度の低い生徒を切り捨てたり蔑視したりするものではなく、彼らの現在の基礎学力に立って、わからなければ繰り返し教え、普通の授業進度に徐々に追いつかせるためのものであるといわれ、そのために、とくに教授能力の優れた教師が配置された。この結果は良好であり、「慢班」の中からも「三好学生」（身体も、勉強も、仕事ぶりも優れた模範生）に選ばれる生徒が現われたという。

この他、優秀な人材を早期に発見する方法として、例えば全国数学コンクールといったものも試みられた。これも文革前に実施されていたものが再開されたのである。七八年五月に実施された際には、各地での予選には高中生を中心とする二〇数万人が参加した。予選を通過した三五〇人の間でさらに決勝が行われ、最終的に五七人の成績優秀者が選ばれたが、彼らはいずれも無試験で大学に入学できる資格を与えられた。数学コンクールは七九年にも催されている。

しかしながら、この数学コンクールは、いたずらに生徒の競争心をあおるとして、行政当局の中でもその効果を疑問視する向きもある。さらに、先述した能力別クラス編成も問題があるとして、例えば上海市のように、こうしたやり方を改めるところも出て来ている。このように、現代化の需要に応じるための種々の改革は、一部はまだ試行錯誤の段階にあるといってよい。

五、ひとつの作文の評価をめぐって

上海市にある敬業中学の高中一年のクラスで、国語担当の李先生は、新学期の始まったばかりの週に、生徒に作文の課題を与えた。「四人組」が打倒された喜びの場面とか、一家団欒の情景とか、何か一つの場面をきめ、テーマは各自で自由に選んでよいと

いうものであった。ところが、この時のある作文がかなりの議論をまき起すことになったのである。それは「乞食」という題で、ある生徒が大晦日の夜、一家で食事をした後、映画を見ようと繁華街に出かけ、そこで一人の乞食の周りに集まった人だかりを見つけた時のことを書いたものであった。

（前略）……この乞食は見たところ田舎の婦人のようで、胸には一歳にも満たないと思われる小さな生命を抱き、道路に座り込んでいた。「哀れな、哀れな私です。右や左の旦那様、どうかお恵みを……」。彼女はたぶん声がかれてしまったのだろう。形容しがたい、か細い震え声で、周りの人にしきりに哀願していた。彼女は薄い単物を身にまとい、ブルブル震えながら、やせ細った両手を人々に向って差し出していた。人々の中には彼女にいくばくかの金や食物を与える者もたびたびあったが、そんな時、彼女の眼には、これらの善意の人々に対する感謝の気持があふれていた。

僕は見続けたくはなかった。埃まじりの一陣の北風が真正面から吹きつけ、僕はたちまち目の前に何か暗いものを感じた。

大光明映画館から出てきても、映画の筋は僕の頭の中には思い浮ばなかった。それどころか、耳元にはぼんやりと、「哀れな、哀れな……お恵みを」という声が聞こえるのだった。振り向くと、「大光明」という三字のネオンサインが目に入った。でも、心の中ではひそかに、「大光明なんていっても、少しも光明なんかありゃあしない」と思っていた。

この作文を書いたのは、態度もよく、努力家で、規則もよく守り、教師を尊敬し、服装も質素という模範的な生徒であった。それだけに、なぜこのようなテーマを選び、また、このような考え方をしたのかが問題となった。指導にあたった李先生は、この作文に表われている社会生活の消極的な面が青少年に及ぼす影響について考え、この作文が含んでいる問題は孤立したものではなく、もっと一般性をもつものと判断した。そこで、彼はこの作文について生徒たちに討論させることにした。

活発な議論が展開されたが、生徒たちの意見は大きく言って二つに分れた。一つは、この作文の視点は正しくないとするもので、「なぜ賑やかな南京路の活気にあふれた場面は書かないで、暗い片隅の乞食を書くのか」、「少しも光明なんてありはしないというのは間違っている」などであった。別な意見は、「テーマは非常に深刻」、「題材は生活にもとづいている」、「題材は新鮮で、場面の描写も実際の状況にぴったりしている」などであった。また、この作文を書いた生徒本人も発言し、「この作文は思想解放の結果だ。もし四人組の横暴がまかり通っていた時代なら、この種の文章は書かれることはなかっただろう」と述べた。

李先生は、生徒たちの意見を要約したのち、彼自身の考えを次のように述べた。すなわち、乞食を作文の題材として取り上げるのはよい。しかし、問題は、この作文が「乞食になったことの原因」、つまり、「四人組」の破壊の結果なのか、それとも自然災害の生みだしたものかといったことに触れず、単に同情を寄せ、し

かも、「光明なんかありはしない」という、まったく筋の通らない結論に達している点である。一つの作品を評価するには、二つの基準がある。芸術的な基準と政治的基準とであるが、いずれの場合も、政治的基準がまず優先する。この作文の文章は優れている。しかし、政治的基準から見れば、それは「支流」を「本流」と見なし、「部分」を「全体」と見なして、間違った効果をもたらしている。従って、この作文に合格点を与えることは出来ないというものであった。

しかし、生徒の中には、この説明に納得しない者もいた。そして、議論は学校の党関係者や地区の教育局まで参加するものへと発展した。師範大学の政治教育の専門家が招かれ、中国の生産力の低さや四人組時代の経済破壊など、社会主義国の中国にも乞食が存在する原因の分析も含めて、生徒たちに対する指導が行われた。この結果、その後この作文問題に対する生徒の感想を書かせたところ、暗い面だけを見て明るい面を見ないのは誤りだとか、明るい面を伸ばすように努力すべきだといった模範的な文章ばかりになったという。

この作文問題にこれほど大きな関心が払われたのは、それが生徒の間の価値基準が揺らいでいることの表われと考えられたからである。中国の高校生の内面まで推し測ることは到底できそうにないことであるが、生徒の間の価値観の動揺は、文革期とそれ以後の社会の間に見られる断層のようなものが、微妙に関係しているのではなかろうか。昨日までの価値はもはや通用しないといった状況も多く見られるのである。そして、先に述べてきた中等教育改革の進展は、そうした急激な諸変化のうちでも、とくに彼ら高校生にとっては最も重大な影響を及ぼすものであることは確かであり、しかも、その中には問題がなくもなかった。しかしながら、目下のところ、あらゆることが現代化の要請に応えるという大前提の下に、急速に推し進められ続けているのである。